学校支援のための訪問研修ユニットの開発と活用の研究
－Q-U（事例検討会）ユニットを使用した学校訪問研修の取組みについて－

山　本　紀　子

福井県教育研究所では、今年度（22年度）から３か年の計画で「学校支援のための訪問研修ユニットの開発と活用の研究」を協働研究のテーマとして進めていくことになった。その背景には、多忙化に伴って教員が研修講座を受講する機会を得にくいという学校の課題、所員の任期が短く研修ノウハウの伝承が難しいという研究所の課題が挙げられる。

教育相談課においては要請訪問研修の件数がここ３年増加し、Q-Uに関する研修の要請は急増している。これは、安定した学級集団こそが、児童生徒一人ひとりの成長を支えるという現場での認識が広がり、多くの学校で子どもたちの内面をとらえる客観的な方法の一つとしてQ-Uの活用に期待が高まってきたためと推察される。

本研究では、ショートプログラムを取り入れた「Q-U（事例検討会）ユニット」を作成することにした。さらにそのユニットを活用した事例検討会が有効であるかを検証した。その結果、事例検討会は教員間の同僚性を高め、情報やスキルの共有化を図り、協働して子どもたちと向き合うことができると考察された。

＜キーワード＞　　Q-U、要請訪問研修、ユニット、事例検討会、ショートプログラム

Ⅰ　主題設定の理由

１　近年の要請訪問研修から

学校訪問研修に出向く機会は平成20年度は16件、21年度は28件、22年度は56件と急増している。特にQ-Uに関する研修は、今年度の訪問研修の総数56件のうち29件と需要が高く、学校のニーズも様々であった。（図１）

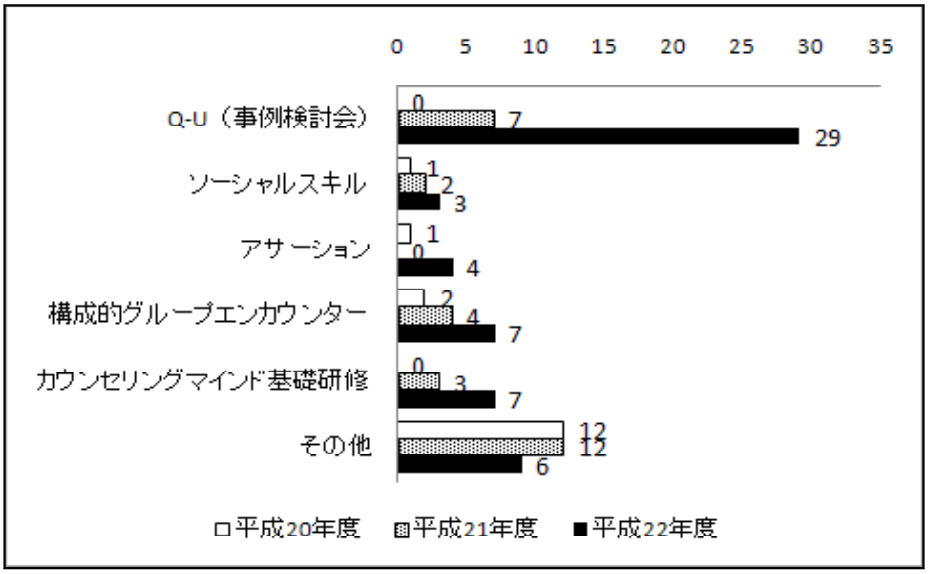

図１　教育相談課 要請訪問研修実施数の推移

20年度までは、Q-Uは特化した要請訪問研修としては実施されておらず、21年度から本格的に実施された。全小中学校に導入するなど、市を挙げて取り組む地域もあり、県内各地で児童生徒理解の有効な手がかりとして活用され始めた。それに伴い、Q-Uに関する訪問要請が増加し、22年度の要請件数は前年度の４倍を超えた。

訪問研修要請時の学校側の要望として主に次のようなものがあった。

- Q-Uの概要と実際のデータを用いた事例検討会ショートプログラム研修を行ってほしい。
- Q-Uを活かした学級づくりができるように各クラスごとに事例検討会を行ってほしい。
- Q-Uを効果的に活用するために、結果の見方や児童・生徒への具体的な支援の方法を教えてほしい。
- Q-Uを児童生徒理解に効果的に活かして、援助を必要としている児童・生徒を早期に発見できるように教えてほしい。

21年度の要請訪問研修では、Q-Uの概要を説明した後で事例検討会をするパターンが多く、事例として１クラスを取り上げ、K-13法（河村茂雄による）で丁寧に分析、話し合い、対応策を考えた。

しかし、今年は「できれば、実施した全てのクラスに対して何らかのアプローチがほしい」「研究所の教職員研修講座で提示されたショートプログラムによる事例検討会をやってみたい」という声が多く聞かれるようになった。

２　平成21年度の研究発表会アンケート結果から

平成21年度の当所研究発表会において発表された『望ましい人間関係づくりのための援助に関する研究－「Q-U（楽しい学校生活を送るためのアンケート）」の研修を通して－』(2009　鳥居)
についての感想は次のとおりであった。

- Q-Uの結果を分析して、具体的なクラスへの働きかけの事例が多く示されると現場は助かる。また、その成果が現れると教師の自信につながるだろう。
- Q-Uの結果を分析することは難しく不安を感じる。また、具体的な学級づくり、人間関係づくりを模索することにも困難を感じる。是非、要請訪問研修を活用したい。
- Q-Uの結果を活用すると、より意図的・効果的な学級づくりへの仕掛けができる。その仕掛けを同僚との交流から短時間で得られる「ショートプログラム」を、多忙な学校現場でも取り入れたい。

これらの感想から、教員はQ-U実施後、その結果を学級経営へ活かしたいと思いながらも十分には活かしきれていない現状がうかがえる。

また、同僚との交流から学級経営の指針を得られるショートプログラムの良さに注目し、多忙な現場でもやってみたいという意欲的な意見も多数寄せられた。

３　研究所所員の実態から

教育研究所では所員の勤務年数が２～３年という現状で研修ノウハウが十分蓄積されないうえ、早期からの研修要請に応えるため、赴任したばかりの所員も講師として研修に応じる必要がある。また、校内研修支援のためのツールも十分に整備されていない現実がある。研修を行う講師として必要な資料セットがあれば基本的なノウハウを学ぶことで自信をもって研修に臨めるであろう。

４　Q-Uを基に話し合うことで期待できる教員の同僚性・協働性の深まりから

児童・生徒の支援に苦慮している担任教師が事例検討会において同僚などと共に効果的な支援方法を探ることは、悩みや困難を抱えた児童・生徒への有効な支援につながり、現場におけるチーム支援の起爆剤ともなるであろう。本音をぶつけ合う中で、楽しさも苦しさも分かち合おうとする仲間意識が芽生えてくることも期待できる。

以上４点から、ショートプログラムを取り入れたQ-U(事例検討会)ユニットを作成し、校内研修を支援していくことが必要ではないかと考えて本研究主題を設定した。

Ⅱ　研究の目的

任期の短い所員にとっても研修に出向きやすく、スムーズに運営しやすい「Q-U(事例検討会)ユニット」を作成する。そして、現場でも取り組みやすく、よりよい学級集団理解の手がかりの一つとなることをねらいとして学校訪問研修で活用する。

Ⅲ　研究の方法

21年度までの資料を基にしてQ-U(事例検討会)ユニットを作成する。Q-Uについての学校訪問研修要請があった場合、学校の希望を取り入れながら、作成したユニットをベースにして研修を行う。研修後、受講者にアンケートおよび聞き取りによる調査を実施し、研修は今後の実践に役立ちそうか、事例検討会は有効であったかという観点で結果を分析・考察する。

Ⅳ　研究の内容

１　ユニット作成について

(1)　Q-U(事例検討会)ユニットのハード面の整備・充実

21年度からの資料を整理し、今年度新たに作成して実際に使用したものは次の通りである。

・Q-Uを学ぶならこんな本や資料で！（参考文献の紹介）
・Q-Uテキスト（小・中高）＊体験あり（60分用）
・Q-Uテキスト（小・中高）＊体験なし（20分～45分用）
・Q-U概論（シナリオ）
・Q-U概論についてのパワーポイント資料
・事例検討会用資料
・受講後のアンケート用紙
・学校との連絡用ＦＡＸ原稿ひな形

＊体験あり：実際のQ-Uアンケートを体験してもらうこと

(2)　Q-U研修実施にあたってのソフト面の整備・開発

①　多忙な現場における時間の節約

21年度末に開発したショートプログラムは、30分コースと45分コースの２パターンであった。この２パターンを学校側の希望する設定時間に応じて柔軟に構成した。特に30分コースは多忙な現場において大変歓迎された。

②　アドラー心理学を踏まえた運営

ショートプログラム開発の土台としてアドラー心理学を援用した。問題の解決策を求めるために原因論ではなく目的論に立つのである。子どもを例に挙げて考えると、問題行動を悪ととらえるのではなく不適切な行動ととらえるのである。不適切な行動は適切なものに変えていけばよいと考える。問題行動は人格から派生するのではなく、行動の取り方から派生すると考えることで解決の方策が生まれてくるはずである。問題行動を起こしても人格が原因だとは考えない。建設的な方向で考えてプラスの行動を引き出して褒める。よくできたことを褒めると行動は変容する。このような考え方を参考にしてショートプログラムを開発した。

ポジティブな気持ちの中でネガティブな行動や在り方を見ると、前向きに解決しようという気持ちになってくるだろう。子どもをより良くしていくためにはどうするのかということを話し合うのが事

例検討会の目的である。

③　担任をチームで支える土壌づくり

話し合うことで事例提出者が元気になり、勇気づけられるようなプログラムでありたいと願い、現場でもこの趣旨が理解されるように実施を試みた。初めての参加者にも分かりやすくなるよう、また、事例提出者にとっても「何か悪いことを言われて終わるのではないか」と心配することがないよう、話合いの流れをシナリオのようにして提示することにした（資料１・２）。

スーパーバイザーからのプレコメントを最初においたのは担任の健闘を讃え、日々の実践に敬意を払い、ポジティブな視点で以後の話合いが進められるようにしたいという意図があるからだ。また、ポジティブポイントについてネガティブポイントよりも先に話し合うのも同様な意図がある。

２　要請訪問研修の実際

平成22年度要請訪問研修受講者数は次のとおりであった。小学校14校 210名、中学校９校 165名、高等学校４校 225名、その他２団体 107名、計707名。

(1)　今年度実施したＱ-Ｕ（事例検討会）ユニットを使用した学校訪問の研修バリエーション

表１　学校訪問の研修パターン

類型	導入	講義	SP	SV	実施数	1研修あたりの総時間(平均)
1		○60分			5	70分
2			○30分		2	60分
3				○ 全クラス	1	60分
4		○20分	○45分		1	70分
5		○30分	○30分		6	70分
6	○	○60分			1	70分
7		○10分	○30分		1	50分
8		○30分	○45分		1	90分
9		○30分		○ 事例研コメントづくり	1	90分
10			○30分	○ 抽出クラス以外へのSV	1	70分
11		○30分		○ 気がかりな子へのSV	1	45分
12		○45分	○30分	○ 抽出クラス以外へのSV	1	120分
13		○30分	○45分	○ 抽出クラス以外へのSV	2	120分
14		○30分	○30分	○ 抽出クラス以外へのSV	1	90分
15	○	○30分	○30分		3	80分
16	○	○30分	○30分	○ 抽出クラス以外へのSV	1	90分

各項目の説明
類型：研修の組み合わせ方
導入：事例検討会を開始する前に心をほぐすアイスブレイクを行った。
講義：Ｑ-Ｕについての概論
ＳＰ：ショートプログラム
ＳＶ：スーパーバイズ（スーパーバイザーからのコメント）
実施数：学校数(団体数)
１研修あたりの総時間（平均）：研修を行うのに必要とした時間

以上のように、現場のニーズに合わせて16のバリエーションで研修を行った。研修時間は１時間から３時間と幅があるが、最も要望の多かったパターンは、概論30分にショートプログラム30分を組み合わせて70分(挨拶・移動などの時間を含める)で実施したものであった。

(2)　受講者アンケートからの振り返り

①　選択式アンケート結果

まず、研修全般で「研修内容は、あなたの期待していたものに合っていましたか」については、「期待していたとおり」94%と高い満足度を得た(図２)。また、「講師の説明は分かりやすいものでしたか」についても「よく理解できた」90%、「概ね理解できた」10%と高い評価を得た(図３)。

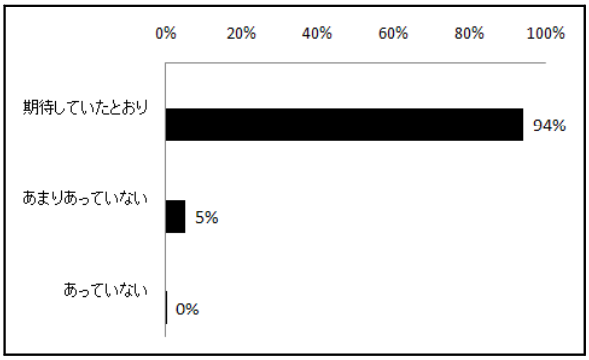

図２　研修内容への満足度　（ｎ＝４１０）

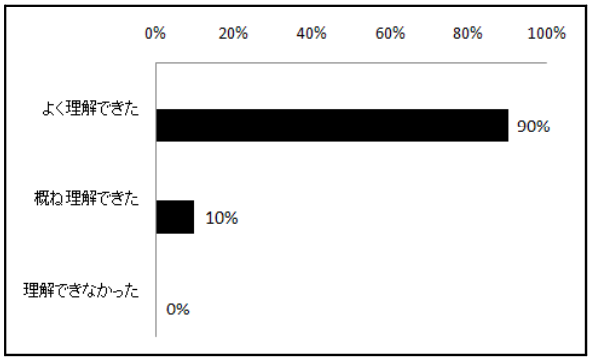

図３　研修内容の理解度　（ｎ＝３９５）

「Q-Uについて新しい情報を得ることができましたか」については「たくさん得られた」63%「まあまあ得ることができた」37%と答えている(図４)。このことから、県内の学校ではQ-Uについて徐々に研究と実践が進んでいると考えられる。Q-Uの概論については、教育研究所での研修講座で使用したテキストを基に説明している。新しい情報を得たという答えがそれほど目立たないのは、研修講座を受講して内容理解が進んでいたり、自学によって理解が深まっていたりする教員が増えているからと推察できる。

「ショートプログラムによる事例検討会の満足度」を聞いたところ、初めて経験する教員がほとんどであったにも関わらず57%の教員が「大変よかった」と答えている。「まあまあよかった」と答えた教員と合わせると99%になる（図５)。

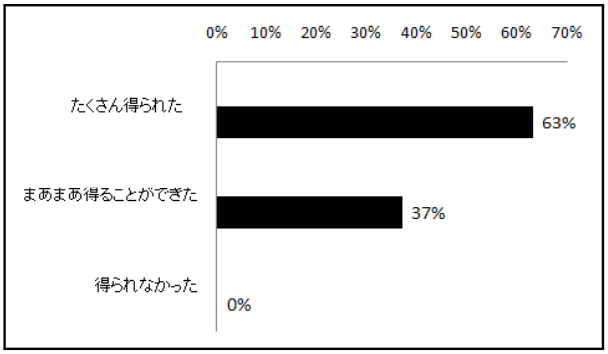

図４　Ｑ－Ｕについての新情報獲得度　（ｎ＝３７８）

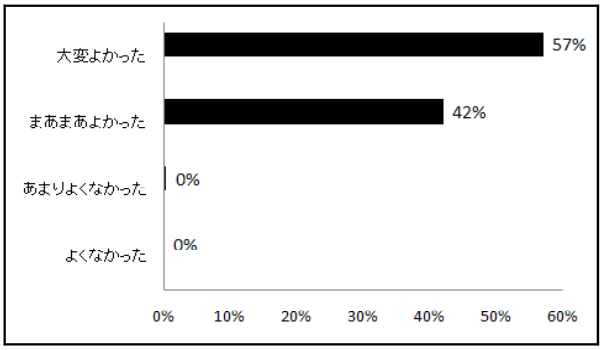

図５　ＳＰによる事例検討会の満足度　（ｎ＝２５８）

② 記述式アンケート結果

ショートプログラムでの事例検討会について、主な意見や感想は次のとおりである（原文どおり）。

ア 時間について

・短時間で書くことで集中できる。
・時間を区切って進めていくと多くの効果を上げることが分かった。すばらしい。
・今回のように時間に柔軟な方がいい。
・一番知りたい対応策に３分しか時間がないのは残念。対応策についてはもう少し時間が欲しい。５分あればもっと意見が聞けたと思う。
・プロセス11・12の時間がもっと長くてもいいと思った。
・30分コースでは短かったので、もう少し長いコースでやりたい。

図６ 事例検討会

イ 情報交換・相互アドバイスという観点について

・先生方から多くの意見をもらえて大変よかった。
・今までとは違う視点を与えてもらった点が参考になりました。
・各クラスの情報を交換できてよかった。
・具体的な取り組み案をいただけたことがよかった。

ウ 仲間意識・同僚性・学び合いにつながるものについて

・担任の先生が元気になる研修会でした。
・楽しく和やかな雰囲気で話し合いができた。
・具体的に一つ一つのクラスについて話し合えたのはとてもgood！今後のさらなる意見交換にもつながります。
・大切なのはチームの力だと感じられた。
・同じグループの先生方にクラスの問題点を共感してもらえたのでよかった。ＳＶの先生にも入っていただけてよかった。
・職員が同じ方向で考える機会がもててよかった。志気が高まったようだ。
・教師自身の学びあいが日常化されるように努力したい。
・悩みを共有する場面がお互いに刺激になる。
・自分のクラスについてご意見をいただけた。ちょっとのきっかけで成長したりよくなったりする希望がもてた。今後担任を続けていく元気が出た。やろうと思っていて実践していないことを再確認できた。
・リフレーミングコメントをいろいろ考えたことが、自分のクラスにも生かすことができそうだった。

エ ショートプログラムによる事例検討会の運営全般について

・グループ分けすることで他の先生方の意見、考えもより分かりやすくなった。
・話し合う内容がきちんと分かったので、話し合いがスムーズに進んでいたと思う。司会もやりやすいと思った。
・物事をよい方向に見ることで前向きになれるということがとても参考になった。
・よく知っているクラスなのに新しい発見もあり、おもしろかった。
・ネガティブポイントで具体的なことを挙げたので、改善策も具体的になり大変参考になった。
・各クラスごとにアドバイスをいただけてとても参考になりました。
・今後の改善点を考える時、リフレーミングコメントが参考になった。
・「質より量」というアドバイスはとても入りやすい一言になりました。
・ＳＶの言葉が的を射ていて、その後の話合いがスムーズにできました。
・思い付きでもどんどん付箋に書いていくと、「ヒット」と思われるアイデアが出てくることが分かった。

・あまり知らなかったクラスのことを知るよい機会になった。
・自分のクラスも、事例として取り上げてもらう価値があると思った。
・マイナスなことばかりに目が行くと何をやってもうまくいかないが、プラス面に目を向けることができた。
・授業で入っていないクラスではあったが、皆さんの話を聞いていたらイメージができた。
・30分コースの６段階で、アイデアを出し合うことで多くの解決方法が見つかることが分かった。
・手立てを細かく立て、一度に多くの成果を求めずに少しずつ伸ばしていこうとするのがよい。

オ　改善点・要望について

・そのクラスの児童のことをよく知っているか、多少知っているともっとアイディアが出せたかもしれない。
・ＳＶからのコメントはありがたかったです。欲を言うと分析結果を紙で欲しかったです。
・他のクラスでもやって、お互いのクラスを比べてみることがしたいなと思いました。
・クラスに入っていない先生の意見が聞けず、残念でした。
・抽出学級を考えるべきであった。
・プログラムの流れがよく理解できないまま進んでいってしまったように思う。
・授業に入っていないクラスに参加したのであまりアドバイスができなかった。ごめんなさい。
・慣れていないので少し戸惑った。定期的に継続していくことが重要だと思う。
・抽出クラスだけでなく、すべてのクラスに対してスーパーバイザーからのコメントがいただけるとよい。
・司会は事前にレクチャーがほしかった。
・参加する人が全員知っているクラスで行った方がいい。
・リフレーミングと具体的な対応策を考えていく時に書き方がよく分からなかったので、例として１つ見せていただけると書きやすくなると思いました。

事例検討会の満足度については、ほぼすべての教員が肯定的な評価を出している(前出図５)。

ショートプログラムを30分コースで実施したのは16校、45分コースで実施したのは４校であった。アの時間の長短についての感じ方は個人により様々である。必ずしも、30分コースの参加者が時間の短さに不満を抱いているわけではない。45分コースで実施した場合でも、対応策を考えてグルーピングする11・12段階(資料２)の時間を長めに取った方がいいという意見があった。３分ずつに区切って話し合いをするのは時間の目安をもってテンポ良く進めていくためであるが、司会者および教育相談課員のアドバイスで時間に柔軟性をもたせることができた場合もあり、それがよかったと答えた参加者もいた。今後は必要に応じて対応策を考える段階で時間にゆとりをもたせることも考えていかなければならない。イにおいても、肯定的な感想が寄せられた。ウでは、チームで取り組むことの必要性を感じ、教師の学び合いが日常化されることを願っている教師の姿が浮かび上がった。悩みを共有したり、同じ方向で考える機会をもてたりしたという感想も多かった。

さらに、エでは「話し合いの流れが決まっているからスムーズに流れた」という評価が多く寄せられた。「物事をよい方向に見ることで前向きな気持ちになれる」という意見や「今後の改善点を考えるとき、リフレーミングコメントが参考になった」という意見は、この事例検討会ショートプログラム開発の土台でもある「ポジティブな気持ちの中でネガティブを見ると、前向きに解決しようという気持ちになってくる」ことと正に合致している。オでは、エで「あまり知らなかったクラスのことを知るよい機会になった」という感想が出た反面「そのクラスの児童のことをよく知っているか、多少知っているともっとアイディアが出せたかもしれない」という感想が目立った。クラスの情報が欲しいという教員の要望をかなえ、話し合いやすい状況をつくるために、プロット図・事例提供者の報告・ショートプログラムの流れのコピーを配布し予習しておいてもらうことも必要だろう。また「慣れ

ていないので少し戸惑った。定期的に継続していくことが重要だと思う」という意見にもあるように、機会をとらえ、時間を確保し、少しずつでも話合いの場を増やしていくことが重要であると考える。

３　要請訪問研修実施校のその後の取り組み

（1）　小学校の事例

学校の規模：各学年２クラスの中規模校

Q-U実施回数：２回（６月、10月）

訪問回数：２回（７月、12月）

事例検討会の持ち方：７月→Q-Uの概論を30分受講後、低・高学年の２部会に分かれ、ショートプログラム30分コースで３年生以上全学級の事例検討会を実施した。

12月→全学級のスーパーバイズを携えて教育相談課員１名が訪問。３・４年生の先生方とは直接話し合った。

７月の事例検討会後の取組みを追跡した対象：３年生２クラス（A学級・B学級）、４年生２クラス（C学級・D学級）

教育相談課からの派遣人数：７月→２名　12月→１名

【A学級の事例】

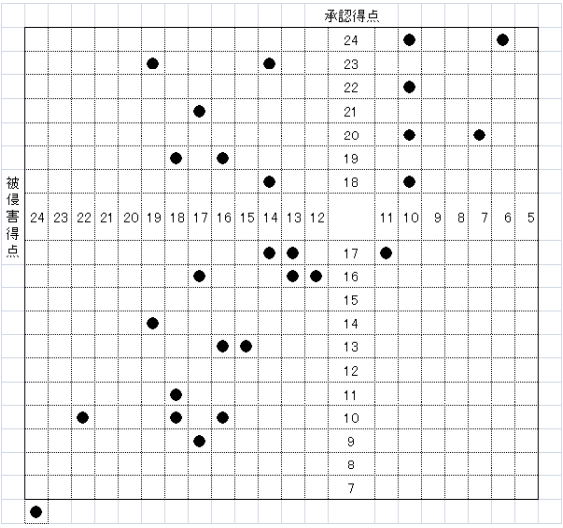

図７　A学級１回目のプロット図

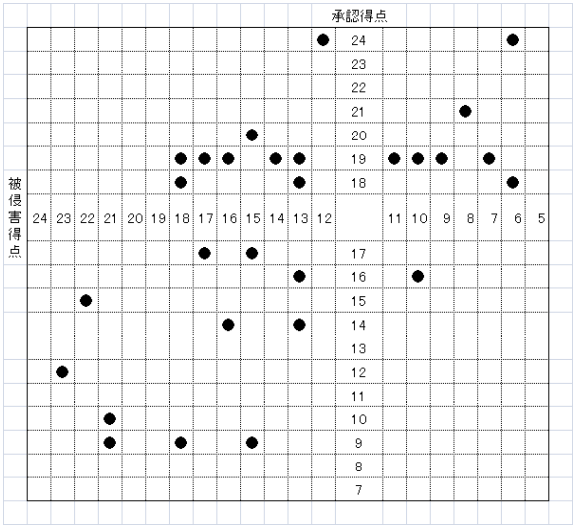

図８　A学級２回目のプロット図

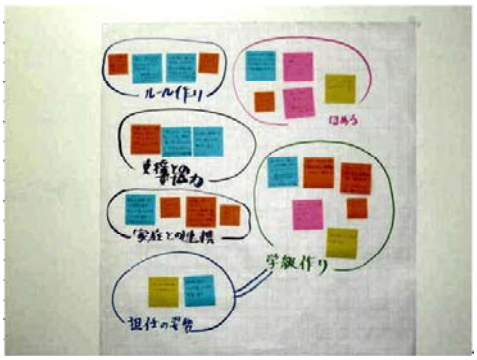

図９　事例検討会でのアドバイス（７月）

＜事例検討会でのアドバイス（付箋に書いてもらった対応策）をもとに実際に学級で実践したこと＞

・学級で楽しく遊ぶ時間を取り入れた。それを約束にして、落ち着いて行動できる場面も増えてきた。
・「今は何をする時間？」と尋ねるところから始め、聞く時間か話す時間か分かるように工夫をした。子どもたちには具体的に言わないと駄目だと実感した。
・口先だけでなく、具体的に褒めようと思った。
・最近、授業の様子が落ち着いてきた。

【Ｂ学級の事例】

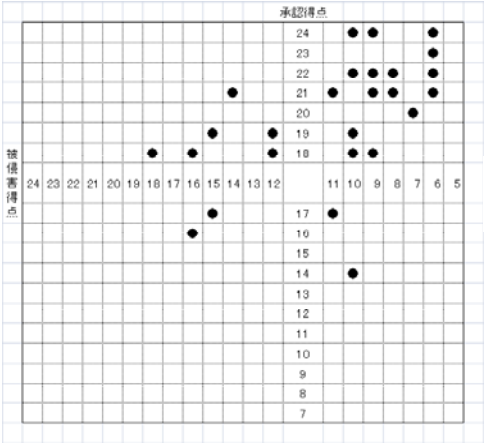

図10　Ｂ学級１回目のプロット図

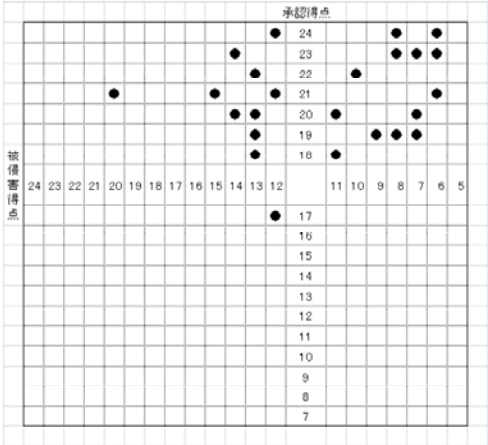

図11　Ｂ学級２回目のプロット図

図12　事例検討会でのアドバイス（７月）

＜事例検討会でのアドバイス（付箋に書いてもらった対応策）をもとに実際に学級で実践したこと＞

・他の人に相談したり、第３者を交えて保護者と話し合ったりすることで、こちらの思いが伝わったり、相手の気持ちが分かったりした。

＜付箋に書いてもらった対応策以外に実践したこと＞

・問題が起きた時には、納得がいくまで個別に話を聞いたり、話し合わせたりした。

【Ｃ学級の事例】

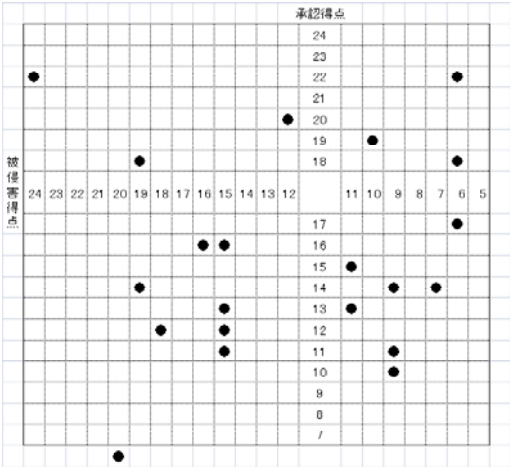

図13　Ｃ学級１回目のプロット図

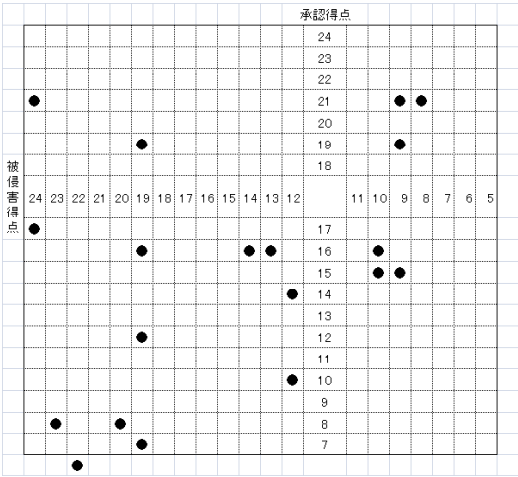

図14　Ｃ学級２回目のプロット図

図15　事例検討会でのアドバイス（7月）

＜事例検討会でのアドバイス（付箋に書いてもらった対応策）をもとに実際に学級で実践したこと＞

・「４年生である」という先入観を捨てた。一人ひとりを先入観なしで受け止めることから始めた。
・攻撃的な児童にも言い分があり、抱えている問題があることが個々に接していく中で分かった。

＜付箋に書いてもらった対応策以外に実践したこと＞

・攻撃的な児童に対して、一人ずつ別々に話をするようにした。

【Ｄ学級の事例】

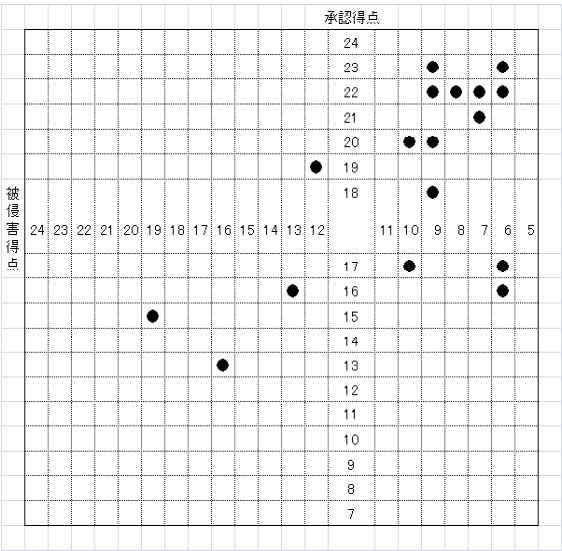

図16　Ｄ学級１回目のプロット図

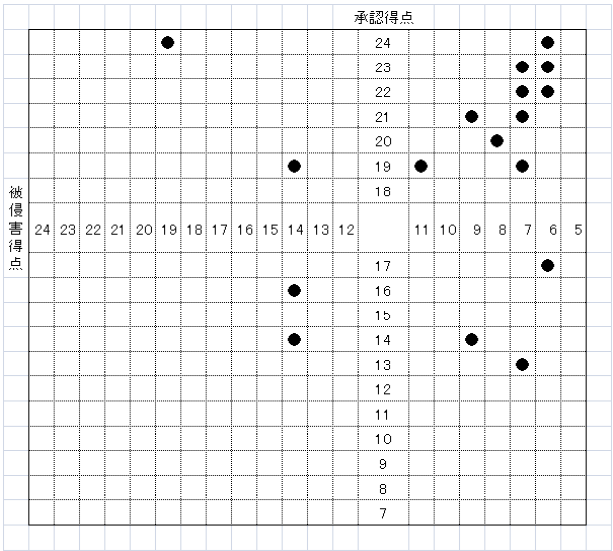

図17　Ｄ学級２回目のプロット図

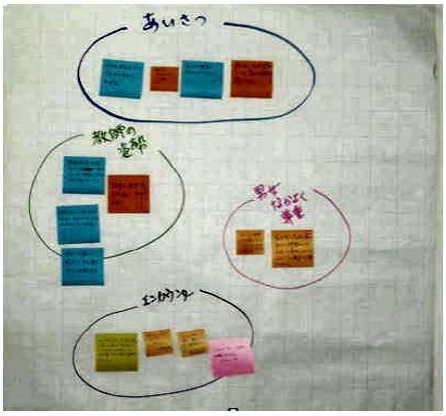

図18　事例検討会でのアドバイス（7月）

＜付箋に書いてもらった対応策以外に実践したこと＞

・いいことがあったら、「花まるくん」をつけている。10個たまったらお祝いをしている。
・全体でいいことをしていたら特に褒めるようにしている。
・子どもたちの様子を見ていて、問題がありそうなときや問題が起きたときには早急に話し合いをするようにしている。

＜事例検討会は教員間でお互いに励まし合い、スキルや情報の共有化を図るという点で前向きなものであると思いますか？＞については次のような意見が出された。（全学年の教員対象に聞き取り）（原文どおり）

・アドバイスを受け、２学期からの子どもへのかかわり方を考えることができた点でとてもよかったと思う。
・今年転任してきたので、昨年度までの様子を教えてもらったり、担任が気づいていなかった友人関係を教えてもらったりすることができて助かった。また、みんなで話し合うことでクラスの問題点を共有できるので、何かあった時に相談しやすいと思った。
・客観的にアドバイスをもらえるのが非常によかった。
・一人だと落ち込んでしまうが、みんなで話し合うといろいろと話が聞けて希望がもてる。
・自分の学級しか見えなくなっていることもあるので、他の先生の実践のよいところを知ったり、みんな悩んでいるんだという安心感がもてたりする。
・普段の会話では愚痴だけに終わることもあるけれど、この話し合いは「こうしたら…」ということを言う必要があるので前向きになれる。
・自分の思いだけではだめだということに気づき、納得できることがある。

この小学校はQ-Uを毎年実施し、集計作業にも慣れている教員が多い。今後もQ-U実施後には事例検討会をする予定である。しかし、客観的な見方のベースとしてスーパーバイズはぜひ欲しいとの要望があった。

(2)　中学校の事例

学校の規模：各学年４クラスの中規模校
Q-U実施回数：２回（６月、11月）
訪問回数：１回（６月）
事例検討会の持ち方：Q-Uの概論を約15分受講後に各学年の３部会に分かれ、ショートプログラム45分コースを実施した。各学年から抽出された１クラスについて行った。
６月の事例検討会後の取り組みを追跡した対象：１年生１クラス（E学級）
教育相談課からの派遣人数：３名

E学級の担任の話から、この取り組みの土台には担任の人柄と教師としての揺るがない思い、加えて担任を取り巻く教師集団の強いネットワークが存在することが分かった(図19)。

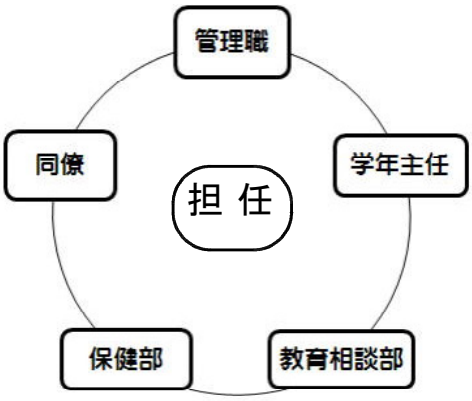

図19　担任を支える職員間のネットワーク

・担任が感じている「今の自分を支えているもの」

自分がかつて勤務していた学校に、どんなつらい時でも「先生！」と呼びかけてくれた子がいた。無理やり何かをしようと思うとうまくいかないけれど、いろんな事情のある子に話しかけられた。そんなことが今の自分の大きな支えになっている。

・担任の基本的な思い

やる気をなくさせ、人の心を傷つけるような言い方はしないでおこうと生徒に呼びかけ、自分も守ろうとしている。のんびりした自分の性格を生かして、ちょっと離れたところから子どもを見ている。中学生は自分自身で良いところを見つけにくい。人と比べて悪いところに気づいてしまう。だから、先生自身が生徒の良いところをできるだけ話そうとしている。良くないことも「ちょっと聞いて」と言って「こんなことが嫌だった」と素直に言っている。

・同僚の教諭との関係

自分のクラスだけでなく、他のクラスの生徒も注意してくれる。みんなで生徒を見ていこうという気持ちが職員全体にあるので嫌な気持ちはしない。特に中学校では担任だけで全てを抱えるのは無理がある。

・保健部及び教育相談部との関係

教育相談部の目標として「Q-Uを活用しての学級経営」がある。担任を支えるために、Q-U実施後に疑問点や特に気がかりな子へのかかわり方について教育相談課へ質問し、校内で伝達講習をしている。また、忙しい担任が使いやすいように「グループエンカウンター＆学級レクレーション集」を作成し、配布している。

・学年主任との関係

困った時には相談に乗ってくれる。道徳の授業にも参加してくれることがある。

・管理職との関係

「子どもに言っていることを自分が本当にやっているか」と職員は管理職から問われる。「当たり前のことを当たり前にするのは教師にとっても大切なことだ」とリーダーシップを取っている。

【Ｅ学級の事例】

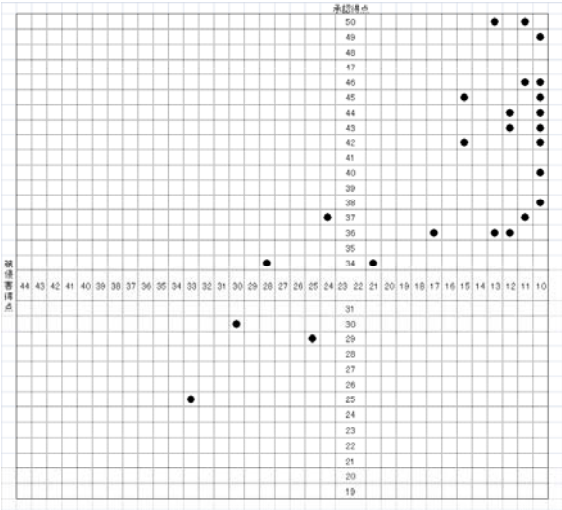

図20　Ｅ学級１回目のプロット図

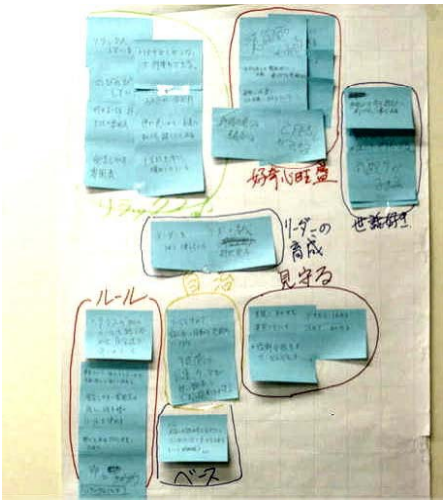

図21　事例検討会でのアドバイス（６月）

このような環境の中で、事例検討会後に実際に行ったことは次のとおりである。

①　担任の実践

ショートプログラムで出された生徒の良い点は、朝の会や道徳の時間に小出しにして生徒に紹介している。「他の先生からもこんなふうに見てもらっているよ」と伝えている。

また、Q-Uの結果を受けて特別な方策や特効薬的なイベントが大事というわけではないという教育相談課員のアドバイスを受けて「担任のさりげないひとこと」「朝の会の話」「道徳の時間の体験談…特に教師の失敗談」などを大切にした。失敗を恐れる中学生にとって、教師の失敗談は「できなくてもみんな一緒やね」と思えてくることがあったようだ。

さらに、保健部・教育相談部で作成した冊子を参考にエンカウンターのショートプログラムを２回実施した。明るい雰囲気を学級内につくるために「マジカルほめことば」と道徳の副読本に出ている「ありがとうを君に」を行った。

② 保健部・教育相談部の実践

Q-Uを実施するにあたっては、「不登校の生徒を出さない」という目標を立てた。学級でプロット図の左下（学級生活不満足群）にいる生徒を知るためにQ-Uに取り組んできた。不登校生徒やその他の気がかりな生徒に対してQ-Uを活用してどのような手立てを取ったらよいかを当所教育相談課に問い合わせた。過剰適応の生徒へのかかわり方については職員の関心が高かったので、職員会議で伝達講習し共通理解を図った。

また、生徒たちが心をほぐして教師も生徒と同じ目線に立ち、一緒に楽しめるゲームをしようというねらいで「グループエンカウンター＆学級レクレーション集」を作成し配布した。

(3) 考察

小・中どちらの事例もQ-Uの実施経験があった。ショートプログラムによる事例検討会は初めてであったが、司会者の手際よさや計時係の機転の良さに支えられて話し合いの参加者が意見を出しやすい雰囲気となった。また、職員全体のチームで子どもたちを支えていこうという意気込みが感じられ、スーパーバイザーとして学校訪問した教育相談課員も元気づけられた。

Ⅴ 研究のまとめと今後の課題

今回の研究には二つの目標があった。一つ目は「Q-U(事例検討会)ユニット」の作成である。二つ目はユニットを基に学校訪問研修を行い、事例検討会は有効であるかを検証することであった。

「Q-U(事例検討会)ユニット」の作成に関しては、平成21年度より受け継がれている資料に新しい情報を加えて一通りの完成を見ている。事例検討会は有効であるかに関しては、実際に研修で体験した教員の感想および事後の聞き取り調査から、同僚性を高め、情報やスキルの共有化を図り、協働して子どもたちと向き合っていけるという点で十分な見通しがあると考えられた。

今後の課題としては次のようなことが考えられる。

1 事例検討会に参加しやすくするために

(1) 教育相談課サイドの手配

・事例検討会を始める前に、これは「担任の先生が元気になるためにする話し合い」であることを確認する。

・話しやすい雰囲気作りが大切なので、アイスブレイクとしての集団ゲームや簡単なエンカウンターを始めに取り入れる。今年度アイスブレイクを実施したのは３校であったが、いずれも和やかな雰囲気ができて話合いに入りやすかった。

・自分の意見を出すことに遠慮がちな参加者もいるので、意見は「質より量」でたくさん出して欲しいということを確認する。

・時間に柔軟性をもたせていいことを事例検討会を始める前に確認する。

(2) 学校サイドの手配

・教育相談課員がスーパーバイズを行うためにQ-Uのデータをあらかじめ送付する際には、男女の別が分かるように表示をする。

・抽出クラスはできるだけ担任の意思により決定する。

・時間に余裕があり必要性があれば、抽出クラスの「プロット図」や「事例提供者の報告」を話し合いに参加する人数分コピーしておく。

・ショートプログラムの流れを参加者全員に配布し、前もって目を通しておいてもらう。

２　事例検討会を数多く実施してもらうために

今年度の要請訪問研修の中で、Q-Uは他と比べ非常に実施回数が多かった。夏休みの要請が多いので、日時が重なったり、教育相談課員の人数が足りなかったりで要望に応えられないこともあった。また、Q-Uの結果を見てスーパーバイズできる課員が少数しかいないこともあり、結果の読み取りやスーパーバイズにかなりの時間を必要とした。教育相談課員の課題としてプロット図読み取りの力量アップが挙げられる。

学校側としては、スーパーバイズを受けるためにQ-Uの結果をあらかじめ送付するのは大きな負担になると考えられる。事例検討会でスーパーバイザーからのプレコメントが最初にあるのは担任の健闘を讃え、日々の実践に敬意を払い、ポジティブな視点で以後の話合いが進められるようにしたいという意図があるが、プレコメントの部分を教員同士の話合いから高められれば一層充実した事例検討会になるのではないだろうか。前もって結果を送付する必要もなくなり、より多く事例検討会を実施できることにつながるとも考えられる。話合いに出てきたアドバイスを基により良い学級経営につなげることができるであろう。プレコメントの部分を教員同士の話合いから導き出す例として、福井県立武生高等学校の森長淑子教諭が実践している「元気づけるプログラム」を紹介する。（資料３）

Q-U開発者の河村茂雄は「Q-U実施後、作戦会議を濃い密度で短時間に行うことが課題である」（2010　３月　明治安田こころの健康財団主催　学校教育講座５）と述べている。また、チーム援助に関して石隈利紀は「ほんもののチーム」になるためには「子どもの変化を伝え合う」「お互いの強さや良さを伝え合う」「共同でできることをさがす」（2010　３月　同講座）と述べている。

今後も現場の教員が元気になれるような、そして元気な気持ちで学級経営をしていくことにつながるような事例検討会の在り方を探っていきたい。

最後に、本研究の実施にあたり、アンケートにご協力くださいました要請訪問研修受講者の方々に厚くお礼を申し上げます。また、御多忙の中、多大な御協力を賜りました研究協力校、研究協力員をはじめ、教職員の方々に心から感謝申し上げます。

《引用文献》

○河村茂雄『Q-U（楽しい学校生活を送るためのアンケート）』図書文化社

《参考文献》

○河村茂雄（2007）『Q-U実施・解釈ハンドブック（小学１～６年共通）』図書文化社
○河村茂雄（2007）『Q-U実施・解釈ハンドブック（中学・高校用）』図書文化社
○河村茂雄（2006）『学級づくりのためのQ-U入門「楽しい学校生活を送るためのアンケート」活用ガイド』図書文化社
○河村茂雄（2007）『データが語る①学校の課題』図書文化社
○河村茂雄（2007）『データが語る②子どもの実態』図書文化社
○河村茂雄（2007）『データが語る③家庭・地域の課題』図書文化社
○河村茂雄他（2004）『Q-Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド』図書文化社
○河村茂雄（2001）『育てるカウンセリング実践シリーズ２　グループ体験によるタイプ別！学級育成プログラム　ソーシャルスキルとエンカウンターの統合』
○河村茂雄（2008）『Q-U式学級づくり（小学校低学年・中学年・高学年・中学校）』
○鳥居登志子（2010）「望ましい人間関係づくりのための援助に関する研究－「Q-U（楽しい学校生活を送るためのアンケート）」の研修を通して－」『研究紀要　第115号』福井県教育研究所

（資料１）ショートプログラム30分コース

Q－Uを実施した後は、みんなで頭を寄せ合い、事例検討会をしましょう！

事例検討会の目的

基本的に、クラスの子どもたちはみんな良くなりたいという思いをもっているはずです。その推進力を高めていくつもりで行うのが事例検討会です。先生方からアセスメントされる（クラスの見立てをされる）事例提供者側としては、欠点を指摘されると思って不安になりがちです。ですから、確かに、こうしたほうがいいのではというアドバイスは貴重ですが、欠点を指摘して終わるのではなく、担任の先生に対して「頑張っていますよ」と認めてあげるところからスタートしたいものです。教師集団が時には弱音も吐き合い、お互いに腹を割って話し合いができるといいですね。事例検討会は担任を応援し、元気づけるための話し合いの場です。

ショートプログラム　30分コースの流れ

	話し合いの流れ	司会の言葉（例）	留意点
1 (3分)	**・SV（スーパーバイザー）よりプレコメント** ＜Ｑ－Ｕの結果についてスーパーバイズ＞	●今から事例検討会ショートプログラムを始めます。今日事例を提供してくださるのは○年○組の○○○○先生です。よろしくお願いします。 ●では、まずＳＶから一言お願いします。	
2 (3分)	**・担任よりポジティブポイントを（一つ）報告** ＜ポイントを一つに絞って、クラスの健闘している点を話す＞	●次に担任の○○先生から、クラスのポジティブポイントを一つ言ってもらいます。 (例)みんなが仲良く遊んでいるところ。	・先生自身が頑張っている点でなく、クラスが健闘している点を言ってもらいます。 これが１番！ということを。
3 (3分) まとめて (5分)	**・ポジティブポイントについて質疑応答** 具体的にクラスの状況をイメージできるように！	●では、今言っていただいたポジティブポイントについて質問や補足（子どもたちの普段の様子を見ていて分かることなど）はありませんか。	・みんなからの質問とそれに対する担任からの答えという形ももちろんＯＫだけれど、みんなから担任の話に付け加えてクラスのいいところを言ってあげるのもいいですね。担任の知らないところでクラスのいいところがいっぱい見つかっているかもしれないから。
4 (3分)	**・担任よりネガティブポイントを（一つ）報告** ＜ポイントを一つに絞って、クラスの苦戦している点を話す＞ これが一番気になるということを出す。	●次はネガティブポイントも一つ言ってもらいましょう。 (例)十分に一人ひとりが意見を言えていないのではないかということ。	・先生ではなく、クラスが苦戦している点です。クラスが苦戦している点＝先生が苦戦している点と思いますが、主語はあくまでも**クラスの子どもたちが困っている点は？**になります。あくまでも子どもたちが主役であることを忘れないでおきましょう。

5 (3分) まとめて (5分)	**・ネガティブポイントについて質疑応答**	●では、○○先生が話してくださったネガティブポイントについて質問や付け足して言いたいことなどはありませんか。	・お互いの情報交換の場にもなります。ポジティブポイントの時と同じように、クラスの状況が具体的にイメージできるように話し合いができるといいです。
6 (3分) (5分)	**・ネガティブポイントについてリフレ－ミングコメントを考える。** ＜各自いくつでも付箋に記入していきます＞ ※リフレーミングとは、見方を変えてみるということです。 （例） 落ち着きがない→元気である おとなしい→落ち着いている 飽きっぽい→好奇心がある など	●うまくいかないとか、こんなところに苦戦していると思われることも、見方を変えるといいところが見えてきますね。 それらをヒントにして、クラスをさらに良くしていくためにどんな手立てや方法があるか考えてみましょう。 どんなことでも遠慮せずに、付箋１枚に１つずつ書いていってください。	・お互いの意見を尊重して、どんな小さなことでも書いていいという雰囲気を大切に。 ・リフレーミングするだけでなく、具体的な対応策を考えます。
7 (3分)	**・コメントグルーピング** （出されたアイディアをまとめる）	●みなさんが付箋に書いて出してくれたアイディアを台紙に貼って、グループ分けしましょう。	
8 (3分)	**・ネーミング** （付箋を整理しながら、タイトルをつける）	●グループ分けしたら、色マジックで付箋を囲み、タイトルをつけましょう。	
9 (3分) (2分)	**・司会者によるまとめ** ＜台紙を見ながら、担任にメンバーの代表としてエールを送る＞	●では、みなさん話し合いご苦労様でした。ここで今日のショートプログラムをふり返りたいと思います。	
１０ (3分) (4分)	**・担任からのコメントと意思表明** ＜事例提供の勇気をたたえ、ねぎらいましょう＞ ＜担任からの協力依頼があれば、できる限り応援の手を貸してあげましょう。＞	●○○先生、今日は事例を提供していただきありがとうございました。○○先生から、今日の話し合いをふり返り、これからできそうなことやこんなふうにクラスを運営していこうということを発表してもらいます。 また、ぜひ他の先生の応援を借りたいと思うことや不安なことなどもあったら言ってください。（教えてほしいことも聞いてくださって結構です。） ●ありがとうございました。○○先生に拍手をして終わりたいと思います。	

（資料２）ショートプログラム45分コース

注：１～３、13～15段階はショートプログラム30分コースの１～３、８～10段階と同じ

Q－Uを実施した後は、みんなで頭を寄せ合い、事例検討会をしましょう！

事例検討会の目的

基本的に、クラスの子どもたちはみんな良くなりたいという思いをもっているはずです。その推進力を高めていくつもりで行うのが事例検討会です。先生方からアセスメントされる（クラスの見立てをされる）事例提供者側としては、欠点を指摘されると思って不安になりがちです。ですから、確かに、こうしたほうがいいのではというアドバイスは貴重ですが、欠点を指摘して終わるのではなく、担任の先生に対して「頑張っていますよ」と認めてあげるところからスタートしたいものです。教師集団が時には弱音も吐き合い、お互いに腹を割って話し合いができるといいですね。事例検討会は担任を応援し、元気づけるための話し合いの場です。

ショートプログラム　45分コースの流れ

	話し合いの流れ	司会の言葉（例）	留意点
4 (3分)	・ポジティブポイントについてサポーティブコメント(付箋記入) <各自いくつでも付箋に記入していく>	●３で話し合ったことをもとにして、このクラスのいいところをたくさん付箋に書いていきましょう。	・付箋１枚につき一つのことを記入します。(このＳＰで付箋を使用する時はすべてこの方法で)
5 (3分)	・コメントグルーピング	●書き込んだ付箋を台紙の１枚目に貼り付け、グループ分けしましょう。	
6 (3分)	・ネーミング <付箋を整理しながらタイトルをつける>	●それぞれのグループにキャッチコピーをつけましょう。	・グループ分けした付箋の周りをマジックで囲み、キャッチコピーをつけます。
7 (3分)	・担任の持ち味コメント	●ここで、担任の先生より、日頃から頑張ってきたことや先生の得意なことを言ってもらいます。後ほど、クラスをさらに良くしていく対応策を考える時にも参考になることですので、先生は遠慮しないで話してください。	・担任の先生が遠慮せず、自分が頑張ってきたことを話せるように、場の雰囲気を大切にしてください。
8 (3分)	・担任よりネガティブポイントを(一つ)報告 <ポイントを一つに絞って、クラスの苦戦している点を話す> これが一番気になるということを出す。	●次はネガティブポイントも一つ言ってもらいましょう。 (例)十分に一人ひとりが意見を言えていないのではないかということ。	・先生ではなく、クラスが苦戦している点です。クラスが苦戦している点＝先生が苦戦している点と思いますが、主語はあくまでもクラスの子どもたちが困っている点は？になります。子どもたちが主役であることを忘れないでおきましょう。
9 (3分)	・ネガティブポイントについて質疑応答	●では、○○先生が話してくださったネガティブポイントについて質問や付け足して言いたいことなどはありませんか。	・お互いの情報交換の場にもなります。ポジティブポイントの時と同じように、クラスの状況が具体的にイメージできるように話し合いができるといいです。
１０ (3分)	・ネガティブポイントについてリフレ－ミングコメントを考えて、付箋に書く。 <各自いくつでも付箋に記入していきます> ※リフレーミングとは、見方を変えてみるということです。 (例) 落ち着きがない→元気である おとなしい→落ち着いている 飽きっぽい→好奇心がある	●うまくいかないとか、こんなところに苦戦していると思われることも、見方を変えるといいところが見えてきますね。 ○○先生から出していただいたネガティブポイントについてリフレーミングして思いついたことを、どんどん付箋に書いていきましょう。 どんなことでも遠慮せずに、付箋１枚に1つずつ書いていってください。 書いた付箋は、２枚目の台紙に貼ってください。	・お互いの意見を尊重して、どんな小さなことでも書いていいという雰囲気を大切に。
１１ (3分)	・サジェストコメント **<付箋記入>** <各自いくつでも付箋に記入していきます>	●クラスの様子が大体分かったところで、このクラスがさらに健康な学級集団として伸びていけるように、対応策を考えて付箋に書いていきましょう。	・１０でリフレーミングした内容を参考に、対応策を考えましょう。
１２ (3分)	・コメントグルーピング <アイディアをまとめる>	●みなさんが付箋に書いて出してくれたアイディアを３枚目の台紙に貼って、グループ分けしましょう。	
１５ (3分)	<担任からの協力依頼があれば、できる限り応援の手を貸してあげましょう。>	なことなどもあったら言ってください。(教えてほしいことも聞いてくださって結構です。) ●ありがとうございました。○○先生に拍手をして終わりたいと思います。	

（資料３）元気づけるプログラム

注：４段階以降はショートプログラム30分コースの４段階以降と同じ

元気になれる事例検討会をしましょう！

クラスの子どもたちは、基本的にみんなよくなりたいという思いをもっているはずです。その推進力を高めていこうというつもりで行うのが事例検討会です。しかし、事例を提供する先生が、欠点を指摘されると思って不安な気持ちになるのは当然のことでしょう。ですから、みなさんからのアドバイスは貴重ですが、欠点を指摘して終わることになっては失敗です。事例を提供してくださる先生に対して「頑張っていますね」と評価するところからスタートしましょう。教師集団が時には弱音も吐き合い、お互いに腹を割って話し合いができるといいですね。事例検討会は**担任の先生を応援し、元気づけるための話し合いの場**です。

元気づけるプログラムの流れ

	話し合いの流れ	司会の言葉（例）	留意点
1 (10分)	**・事例提供者の説明** **・参加者からの質問** **理解の確認**	★今から事例検討会元気づけるプログラムを始めます。今日事例を提供してくださるのは○年○組の○○先生です。よろしくお願いします。 ★では、まず○○先生のクラスについて説明をお聞きしましょう。 ★わからなかったところを質問してください。	・事例提供者は用意したメモに従って説明する。質問はあとからまとめて行う。 ・時間優先。だらだらやらない。
2 (5分)	**・参加者からのショートコメント** ①思い浮かぶクラスの雰囲気をプラスイメージの言葉で ②ルールについて ③リレーションについて ④子ども達を讃えたい点、勇気づけたい点 ⑤先生を讃えたい点、勇気づけたい点	★では、○○先生のクラスについて、５つのポイントで短いコメントを◇色の付箋に書いて台紙の上に出してください。付箋１枚にコメント１つでお願いします。 ５つのポイントに１つずつ出せたら、さらに、どのポイントについてでもいいですから、出してください。	・どのポイントについて書いたのかわかるように、付箋に番号も書いておくとよい。 ・あまり深く考え込まずに、プラス思考で思いついたことをどんどん出す。
(3 分)	**・ショートコメントの整理と話し合い**	★それでは、出されたコメントについて話し合いながら、台紙の上にポイントごとにまとめて貼って、マジックで囲んで見出しをつけましょう。	・出されたコメントをみんなで見て、感想を出し合いながら、台紙の上に整理していく。話し合いをすることで、コメントの意味も参加者に共通理解される。
3	**・担任よりポジティブポイントを(一つ)報告** <ポイントを１つに絞って、このクラスの健闘しているところを話す>	★さて、担任の○○先生から、クラスのポジティブポイントを１つ言ってもらいます。 （例）みんなが仲良く遊んでいるところ	・先生自身が頑張っている点ではなく、クラス（子どもたち）が健闘している点を言ってもらう。これが１番！ということを。
まとめて (5 分)	**・ポジティブポイントについて話し合い**	★では、今言っていただいたポジティブポイントについて質問、あるいは補足（子どもたちの普段の様子を見ていてわかること、エピソードなど）はありませんか。	・参加者からの質問とそれに対する担任の答えという形でも、もちろんよいが、みんなから担任の話に付け加えてクラスのいいところを言ってあげるのもいい。担任の知らないところで、クラスのいいところがいっぱい見つかっているかもしれないので。